

コンサルテーション事業報告

事業名 重複障害児・者コミュニケーション支援

事業代表者 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

対象 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

目的 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲の在り方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

主なスタッフ 川住隆一および川住研究室所属指導学生

東北大学大学院教育学研究科：永瀬 開・松崎 泰・南島 開・広木 純・鍋倉康平
東北大学教育学部：菅野 彬・中村優里・成田詩織・山崎勇人・大和宏佑

実施内容

(1) 教育・養育相談として対応している事例 (8 事例)

8 事例のうち 1 事例は盲ろう障害、2 事例は重度知的障害、5 事例は重複障害を有している特別支援学校の生徒あるいは青年である。このうち 2 名は本年度新規の相談事例であり、6 名は継続相談の事例である。各々月に 1 度位の割合で保護者と共に来談しており、プレイルーム (行動実験室) 等でスタッフが分担して対応している。全員がコミュニケーションの発信・受信手段やコミュニケーション内容の拡がり为目标であるが、その他に、楽器や玩具の操作行動、絵画の表現行動、スイッチの操作行動、全身性の運動活動の広がりも大きな課題である。

今年度、この内の 1 事例 (盲ろう事例) については、菅野が、障害特性に配慮しつつ、振動スピーカーを利用した「音楽鑑賞」場面を設定し、その活動時のビデオ分析を通して対象者の微弱な動きを把握するとともに、対象者の余暇活動の可能性や周囲の人との相互交渉の可能性について卒業研究としてまとめている。

また、レット症候群の事例は、これまで長期にわたってかかわりを行ってきたが、昨年の夏頃より自力歩行が困難となり車いすを利用しての生活となっていた。これにより、以前は関心を寄せた玩具・楽器等に自力歩行で接近し、上体を前に曲げて左腕をものに触れ

させるような行動を示していたが、それが困難となった。また、以前より、係わり手が本人の手を取って玩具・楽器に触れさせようとする和不快な表情を示してその手を自分の方に引き寄せる動きや、呼吸を荒くする様子があった。しかし、昨秋以降、係わり手が対象者の手を取り、少しの力で押すと振動したり音楽が鳴る玩具や楽器のキーボードに触れさせると、じっとその玩具に触れていたたり指を動かす様子が見られ、手が外れると触れなおすような動きを見せるようになった。この様子に保護者も驚いており、手による探索行動に発展しないか注目している。

さらに、昨年秋より相談に応じてきた事例は、多動傾向があり夜もあまり眠らないため保護者はその対応で大変疲れていることから、今後どのように対応すべきか悩まれておられた。そこで我々が行ったことは、本児が喜び、継続を要求する活動を見出してその場面を写真に撮り、本人が要求のためのコミュニケーション手段とすること、また、「声かけ」「身振り動作」「写真」を用いて活動の休憩時間を知らせること、具体的には全員が床に座り、母が本児を抱いて膝に乗せ「小声で数を数える」ことを行ってきた。この結果、写真で要求を伝えることはすぐに理解して写真を利用するようになった。また、休憩も理解して我々の予想以上に母とともに「休憩」をするようになった。今後どのように子どもの変容が見られるのか、保護者とともに楽しみにしている。

以上の他、重度の肢体不自由のある子どもや青年に対しては、これまでと同様本人が楽しい様子を示す活動の中で、種々のコミュニケーション手段を用いたやりとりを行いつつ、本人が使用できそうなコミュニケーション・エイドを探っている。

(2) 支援学校教師や NPO 法人職員との連携

代表者は、宮城県立特別支援学校小学部 1～2 年生の重複障害児学級担任の教師と連携し、在籍児童のコミュニケーション行動を拓げる糸口を探し出すとともに AAC・支援器機使用の方略について検討してきた。今年度も特に、人やものへの自発的な動きが少なく介入の手がかりが見えにくい児童への対応について検討してきた（学期に 1 度の割合）。また、宮城県の高専専門学校教員、特別支援学校教員、NPO 法人職員等とともに障害者のコミュニケーション支援とコミュニケーション代替手段の開発・活用を目的とした研究会「楽暮プロジェクト」の活動に取り組んできた（毎月 1 回）。

(3) 研究発表等

菅野 彬 (2016) 盲ろうに加えて身体障害を持つ重度・重複障害者の余暇活動に関する研究—「音楽鑑賞」に着目して—。平成 27 年度 (2015 年度) 東北大学教育学部卒業論文。

付記：事業の推進に当たりましては、宮城教育大学の野崎義和先生のご協力を得ました。記して感謝申し上げます。